

黒皮カボチャ新品種「宮崎早生2号」「宮崎抑制2号」について

河原 一五郎・富永 寛（宮崎県総合農業試験場）

KAWAHARA, I. and H. TOMINAGA: New Varieties of Squash "MIYAZAKIWASE 2" and "MIYAZAKIYOKUSEI 2"

宮崎県総合農業試験場では、宮崎の特産物としての「日向カボチャ」の品種改良を続けてきたが、今回、ハウス栽培及び露地抑制栽培用品種として、当初の育種目標に合った2品種が得られたので、本品種の育成経過並びに特性の概要を報告する。

宮崎早生2号について

1. 育成経過

宮崎県におけるハウスカボチャの品種は、1963年に当場で育成した宮崎早生1号が中心であるが、この品種はもともと早出しのトンネル栽培用として育成されたものであり、ハウスにおける親づる1本仕立ての立体栽培では草勢が強く、つるばけし易いため変形果が多く上果率が低い傾向がみられ、果形的にも縦溝間の肋の大きさが不揃いのため変形果になり易い欠点があった。そこで、1971年から低温期のハウス用品種の育成に着手し、育種目標を

- 1) 平均果重が1kg前後の中型果であること
- 2) 早生性で悪条件下でも果形がくずれ難いこと
- 3) 低温時の着果性がすぐれ多収であること
- 4) 果肉色濃く、食味佳良であること

とした。

1975年には「262×G2」を育成して普及に移し、ハウス後作を主体に約80haで栽培がなされてきたが、果肉がうすい欠点があった。そこで、果肉色の濃い、食味のすぐれた品種の育成を継続し、現地と併せて多くの組合せについて能力の検定を実施してきたが、ほぼ当初の目標に近いF₁組合せが得られたので、宮崎早生2号と命名して本年度より普及に移した。

母は26223で、博多早生×日向14号の組合せから分系固定した系統122に博多早生を戻し交雑し、その自殖後代から分系固定した果肉色が濃く、果実の肋が菊座型に揃う中小型の系統である。父はG22で、印喰の分系のうち、草姿が小型で果肉色の濃い系統である。

第1表 総収量及び品質別収量 (kg/a)

品 種	総重	対比	上		中		下	
			重量	率	重量	率	重量	率
宮崎早生1号	572	100	426	74.4	129	22.6	17	3.0
262×G2	626	109	510	81.5	100	16	16	2.5
宮群早生2号	637	111	564	88.5	61	9.6	12	1.9

は種10月7日 定植11月13日 立体親づる1本整枝200株/a

2. 特 性

草勢は中程度で、つるの伸長はよい方であるが、着果するとつるの伸長が止まり易いので過繁茂になることは少ない。雌花は第1花が9節前後に発生し、以後4節ごとに発生するが、第1果は12~14節の着果が適当である。雄花は低温時でも最初から正常な花粉が発生するので授粉に使うことができる。

果実は腰高で平均1kgの中型果であり、宮崎早生1号より約10%大きく、総収量においても10%程度増収する。試験結果では、草勢を抑えて栽培したため、全般に1果平均重量が低くなった。また、宮崎早生1号は比較的上果率が高くなっているが、一般栽培ではつるばけして過繁となり易く変形果が多いため、上果率が低下することが多い。本品種は前者に比較して、過繁茂になり難く、果形的には肋が菊座型によく揃うので変形果の発生は少なく上果率が高い。外観は瘤の程度がやや少ない傾向であるが、果皮色は黒味強く、また、果肉色は黄色が濃く肉質は粘質で食味もすぐれる。

3. 栽培上の注意

本品種は低温期におけるハウス栽培用に育成したものであり、高温長日時の育苗では側枝が癒着して変形果となることがあるので、播種期は10月上旬以降が望ましい。着果したものは果形が完成するまでつる下げを中止し、垂れ下ったつる先を引き上げる程度に留めておき、収穫直前につる下げを行なうと変形果が少ない。また、着果するとつるは心止まり症状となるが、収穫後は草勢の回復を待つて次の果実を着果させることが大切である。

施肥量は10月播種の促成栽培で、a当たり成分量で窒素4.6kg、燐酸2.5kg、加里3.0kgが標準であるが、追肥は草勢をみながら液肥を主体に施用する。ハウス後作では基肥を施用しない場合が多いが、特にキュウリの後作では基肥の施用は行なわない。

4. 栽培適地帯

沿海地帯のハウス促成長期栽培およびハウス2期作栽培の後作に適し、宮崎県では本年度約80haの作付けが見込まれている。

宮崎抑制2号について

1. 育成経過

宮崎県の露地抑制カボチャは早期水稲の後作として導入された作型であるが、当初、適当な品種がなく、早出

第2表 平均1果重及び果実特性

品 種	番果別平均1果重 (g)						果高/ 果径	瘤の 程度	肩の 揃い	果皮色	果肉色
	1	2	3	4	5	全期					
宮崎早生1号	470	515	800	1030	720	700	0.73	卅	△	◎	○
262×G2	480	580	950	1130	—	780	0.73	卅	◎	○	△
宮崎早生2号	500	550	950	1150	1170	790	0.73	卅	◎	◎	◎

し用に育成された宮崎早生1号を栽培していたが、変形果が多く作柄が不安定であった。その後、業者育成のタチバナ3号が栽培されるようになり生産量は飛躍的に伸びたが、果重型の品種で果数が少なく果実が大きすぎる欠点があった。当場では中型で高温時にも雌花の発生が安定し変形果の少ない品種の育成に着手し、1976年に宮崎抑制1号(命名は1978年)を育成して普及に移しているが、果肉色がうすいという欠点があったため、引き続き果肉色に重点をおき育成を続け、有望組合せにつき現地と併せて検討した結果、ほぼ目標に近い組合せが得られたので宮崎抑制2号と命名して本年度より普及に移した。

母は宮崎早生2号の母と同一の26223であり、父は212で、博多早生×日向14号の後代から分系固定した草勢が強し果実は大型で短期増収型の特に果肉色の濃い系統である。

2. 特 性

草勢は強い方でつるの伸長がよく側枝の発生も早い。葉色、葉の大きさは中程度であり、着果性がよいのでつるぼけになり難い。雌花は第1花が14~16節に発生し、後は4~5節ごとに発生するが、主枝の第2花は側枝の

第1花と重なって同時に着果することは少ない。しかし、側枝の着果後は主枝の第3花が着果し易く、気象条件がよいと株当たり3個の着果は容易である。

果実は腰高で肩の張りがよく、縦溝間の肋は菊座型で変形果が発生し難い。平均果重は1.2kg程度で、宮崎抑制1号に比較して、特に果肉色は濃く食味もすぐれる。収量はいずれの品種も大差ないが、タチバナ3号が大果に過ぎ果揃いが悪いのに対し、本品種は果数が前者より20%程度多く、しかも果実は中型果で果揃いもすぐれ上果収量が多く収益性も高い。

播種期は宮崎県の沿海地帯においては、8月20~23日が適期である。あまり早まきして高温長日条件下で栽培すると、つるぼけして雌花の発生も悪く、果実では花痕の周辺に黄色の瘤が発生する。

3. 栽培上の注意

ほ場は排水のよいところを選び高畝とする。施肥量はa当たり成分量で窒素2.5kg、燐酸2.5kg、加里2.0kgが標準量であるが、その半量は基肥とし、追肥は早目に行なう。植付けは4.5m畝に25~30cm株間とし、親づると子づる1本の2本仕立てとする。つるは畝方向に対して斜めに誘引するが、つるが重なって込み合ってくると雌花の発育が悪く落果が増加するので、整枝は遅れないように注意し、つるは平行に誘引する。交配は花粉とホルモン剤を併用して確実に着果させる。

生育の前中期はウイルス病の罹病が多いので、全期間を通してアブラムシの防除に努め、開花前に発病した株は早目に抜き取る。また、台風時には排水をよくし、通過後には疫病、褐斑細菌病等の防除を徹底する。

なお、収穫は完熟したものから行ない、貯蔵する場合でも完熟したものを貯蔵する。

4. 栽培適地地帯

沿海地帯の早期水稲後作の露地抑制栽培に適し、宮崎県では本年度約350haの作付けが見込まれている。

第3表 総収量及び品質別収量 (kg/a)

品 種	総重	対比	上		中		下	
			重量	率	重量	率	重量	率
タチバナ3号	250	100	170	68%	65	26%	15	6%
宮崎抑制1号	256	102	202	79	36	14	18	7
宮崎抑制2号	261	104	214	82	37	14	10	4

は種8月11日 定植9月4日 親子づる2本整枝78株/a

第4表 株当たり収量及び果実の特性

品 種	株当たり収量		果高/ 果径	果の 揃い	瘤の 程度	果皮 色	果肉 色
	個数	重量					
タチバナ3号	2.5	3.21	1280	0.65	△	卅	◎
宮崎抑制1号	2.9	3.28	1130	0.68	◎	卅	△
宮崎抑制2号	3.0	3.35	1120	0.65	◎	卅	◎